庭でのオーガニックとは

庭でのオーガニックとは何か、私たちなりに3つの定義を考えてみた。これをもって、有機的なつながりから持続可能な社会を創造していきたい。

その3つとは、①多様であること、②循環すること、③地域特性があること。現代では、オーガニックをはじめ、エコ、地球に優しい、ロハスなどの言葉が安易に使われているが、ほんとうに地球に負荷をかけていないのか、はなはだ疑問に感じることがある。そのときの判断基準のひとつになればいいと思う。

多様であること

環境活動家でディープエコロジー（人間中心ではなく、全生命に固有の価値があると考える思想）の研究者であるジョアンナ・メイシーは「ひとつひとつの生命は、複雑な相互関係の結節点。偶然と必然が織りなす複雑な関係を意味している」と語っている。まさに自然界は、網の目のような複雑なつながりをもっていて、単なる「弱肉強食」などではない。むしろ、生態系ピラミッドの頂点にいる生き物は、たくさんの下位の生き物たちによっ

て支えられている。ピラミッドの下層の生き物がダメージを受けたとき、真っ先に絶滅の危機を迎えるものは頂点にいる生き物なのだ。さらに、生き物たちは食う食われるだけの関係ではなく、木の洞（うろ）がいろいろな生き物の巣になったり、実を食べた鳥がタネを遠くへ運んだり、蜜を吸うハチが花粉を運び受粉を助けたりなど、多様で

虫やカエルの住処・インセクトホテルがあることで、周囲の生態系はもっと豊かになる

あることでこの地球は成り立っているのだ。

多様性とは、生物と人間、人間と人間、生物と生物の関係が有機的であることはもちろん、それらすべてと社会の関わりも有機的でなくてはならない。つまり、有機的とは1対1の関係ではなく、複数のものや事柄が多層的に折り重なってできる関係のことである。しかし、複雑ならよいということではなく、複雑ながらも相対的にはそれぞれが生かし合う関係である。つまり、「いのちのめぐる関係」とも言える。

農薬や化学肥料を使わないということがオーガニックなのではなく、オーガニックの第一歩として農薬や化学肥料を使わないということが大切なのだ。

多様に対し、モノカルチャーは単一のものだけで、経済効率を優先した状態である。よく見かける一面シバザクラの公園や、産地化した単一品種栽培の農産物などはモノカルチャーにあたり、病虫害が発生した場合、壊滅状態になりやすいため、多量の農薬や化学肥料が必要になる。有機的な多品種の栽培であれば、病虫害の大量発生や天候不順でのリスクを分散することができる。目先の生産性は低くなるのかもしれないが、将来にわたる農薬による環境汚染や土壌の悪化、健康被害の対策にかかる個人的・社会的コストが増大することを考えれば、有機的で多様であることが望ましい。まして、一度失われた環境や健康はお金では取り戻せないのだから。

上から、キイロテントウの幼虫・さなぎ・成虫。庭ではウドンコ病菌を食べてくれる

循環すること

生命活動とは循環すること。一個体の内部での体液等の循環があり、呼吸や栄養の摂取や排泄（はいせつ）は外部との循環である。そしてその生息環境では雲や雨や川、海流としての水の循環、風や気流による大気の循環、風化や浸食、堆積や隆起という長い時間をかけた大地の循環がある。この循環の中に命があり生態系がある。

花壇に生えた雑草も、生態系の大事な一種であり、うまく生かすとナチュラルな庭になる

生態系は生命活動による物質の変容と循環と言うことができる。死の定義を「活動の停止」とするならば、生態系に活動の停止はない。一個体の死はその個体の生命活動の停止だが、その個体を構成する物質の変容と循環は、途切れることなくほかの生命活動に受け継がれる。

この循環が阻害されれば、有機的なつながりが壊される。分解せずに、土に還ることのない化学物質や放射性物質はそれを引き起こす。

化学物質である殺虫剤、殺菌剤、除草剤等の農薬の目的（機能）は生命活動を阻止すること。安全基準に従って散布されても、農薬の機能に変わりはない。日本での農薬出荷量は、以前より減っているが、ここ数年は毎年、約18万トン（２０２２年、農薬工業会資料より）である。これだけの農薬が毎年、環境中に拡散されていることになる。

山林や農地、市街地等で散布された農薬は、生態系に大きなダメージを与えつつ、揮発によって大気に拡散したり、雨によって地下水に浸透したり、河川を汚染しながら河口に沈殿して、湖や海に流れ出る。汚染されたプ

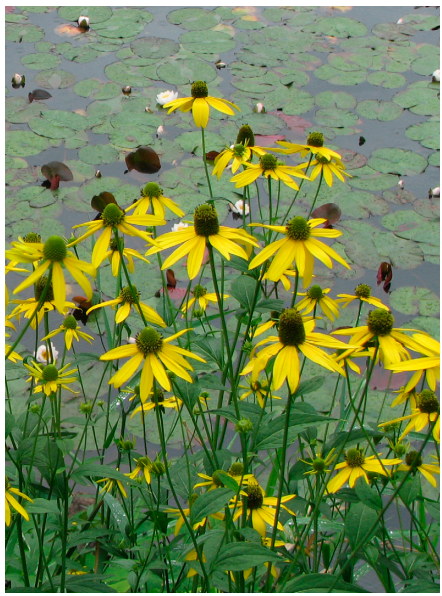
ランクトンを食べた回遊魚や海流によって海洋に拡散されていく。化学物質や放射性物質はそのまま薄まって終わりということにはならない。食物連鎖による生体濃縮を経て海産物や肥料という形で、私たちの生活圏に戻り、私たちの健康を損なう。農薬などの化学物質が、新生児や南極のペンギンから検出されていると報告されている。

生態系に一旦、化学物質や放射性物質が入り込むと、将来にわたって生態系を蝕んでいくのである。

地域特性があること

日本の場合、すべてを在来種でまかなうといっても、歴史的にかなりのものが外国から入ってきているのでなかなか難しいが、それでも長い時間をかけて日本に馴染んで安定してきたものを使うことが大事である。近年、園芸店では、見たこともない花などが次々と売られているが、ひとたび野生化したときに、「侵略的な外来種」として在来の生態系を脅かす存在にならないか常にチェックする必要がある。

現に、オオキンケイギクやオオハンゴウソウなどは、



緊急対策外来種のオオキンケイギク（左）とオオハンゴンソウ（右、撮影：泉健司）

環境省の「生態系被害防止外来種リスト」で緊急対策外来種に指定されている。

また、F1種、遺伝子組み換え、ゲノム編集など、新しいテクノロジーが次々と生まれているが、何の手も打たなければ、結果的には在来種や固定種が、その地域から排除されることになる。

しかしながら、オーガニックで気をつけたいのは、在来種や固定種を守るということから純粋種・純血種にこだわり、排外主義、そしてファシズムや全体主義に陥りやすいということだ。事実、ドイツにおける優生思想やナチス政権を最初に支持したのも、有機農業や環境保護を謳うエコロジストたちであった。そのことを私たちは忘れてはならないと思う。

COLUMN

庭を自分の居場所にする

01

何か大がかりなリフォームをするのでもなく、庭にただひとつ、椅子を置いてみるのはどうだろうか。

以前、園芸療法の研修でカナダの高齢者施設へ行ったとき、植物に囲まれ奥まった場所のあちこちに座り心地のよさそうな椅子が置いてあることに気づいた。みんなで集まれるような中央広場もあるのに、なぜ?と思い聞いてみたところ、一人静かに過ごしたいこともあるので、椅子を置くのですよ、と言われた。

なるほど、人といるのは楽しいことだけれど、たまには一人の時間に身をゆだねたいと思うのも、また人間。庭は、鳥の声や風のそよぎを感じられ、自分を解放できる場所でもあるのだ。

そういう場所で、先の不安や心配を忘れ、しばし自分の時間を生きてみる。そこから庭とのつながり、生き物たちとのつながりが感じられるかもしれない。